平成29年度　下野市中学生平和研修派遣事業

報告書

広島県広島市

平成 29 年 8 月 5 日(土)～8 月 7 日(月)

下　野　市

市長あいさつ

下野市長　広瀬寿雄

「広島が全滅です。新型爆弾にやられました。」

昭和 20 年 8 月 6 日。広島に投下された原爆の第一報を伝えた岡ヨシエさんが、本年５月19日、86 歳でお亡くなりになりました。

当時 14 歳だった岡さんは、広島城にあった旧日本軍の司令部に連絡係として学徒動員されており、戦後は、原爆の後遺症に苦しみながら、被爆当時の体験や平和への願いを語り継ぐ活動を晩年までお続けになりました。

被爆者の方をはじめ、戦争を知る世代は年々少なくなってきていますが、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さ、そして生命の尊厳について、若い世代に語り継いでいくことは、我々にとって重要な責務であると考えています。

下野市は、核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現を願い、平成１８年６月１６日に「非核平和都市宣言」を行いました。

中学生平和研修派遣事業は、非核平和都市宣言の推進及び平和学習活動の一環として、市内４中学校から生徒を広島に派遣するもので、今年で４回目の派遣となりました。

派遣団の生徒たちは各学校の、そして下野市の代表として平和記念式典へ参列し、各学校の生徒が折った千羽鶴を「原爆の子の像」に奉納しました。

また、広島平和記念資料館、原爆ドームなどの見学、被爆体験講話の聴講、灯ろう流し体験を通じ、「平和の尊さ」、「生命の尊厳」、「平和を愛する心」を学び、恒久平和への理解と認識を高めていただいたことと思います。

今後は各中学校の文化祭において、広島で感じたこと、学んできたことを学校の生徒たちに伝え、共有するとともに、さらに次の世代へ伝えていってもらえるものと期待しています。

最後に本事業にご参加いただきました生徒及びその保護者の方々、また、事業実施に向けてご協力いただきました多くの方々に心から御礼申し上げます。

派遣団団長報告

下野市中学生平和研修に参加して

下野市中学生平和研修派遣団団長　齋藤　正明

８月５日（土）から７日（月）の３日間、下野市・壬生町中学生平和研修派遣団団長として、中学生を引率して広島での研修に参加してきました。今回の研修も例年同様の生徒数で、下野市４校の８名と壬生町２校の４名、合計１２名の参加でした。

この研修の目的は、「平和記念式典への参加や原爆ドーム・平和記念資料館等の見学などを体験することにより、中学生に核兵器の恐ろしさ、平和の尊さ、生命の尊厳について学び、将来につなげる生徒を育成する」です。生徒たちは、第１回の研修会でこの目的を確認したとき、その責任の重さを実感していたようでした。

また、事前研修で一人一人の発表を聞いた時には、広島の原爆投下や戦争についてよく学習をしているという印象を受け、広島での研修への意気込みを知るとともに、頼もしさを感じました。

広島までは、約６時間弱電車と新幹線で時間を過ごし、広島駅に着いたときは熱中症が心配になるほどの晴天でした。街を歩くと、街路樹で数え切れないくらい多くの蝉が、夏の暑さを増すような勢いで鳴いていました。原爆が投下された72 年前もこのような天気だったと聞いています。賑やかだった街が一瞬にして廃墟と化した訳ですが、今はそのことが信じられないほどの賑やかさを取り戻していました。

まず、私たちは路面電車で原爆ドームに行きました。テレビでは何度も観ていましたが、実際に前に立ってみると、まるで時間が止まっているようで、原爆の衝撃のすさまじさが伝わってきました。そして、多くの人が一瞬で命をなくしたという何ともいえない重たい独特な雰囲気を肌で感じました。ドームの前で記念撮影を行ったのですがその恐ろしさを感じた生徒たちは笑顔で撮ることができなかったようです。その後、被爆者の川崎さんから体験談を聞きました。川崎さんは、原爆体験の恐ろしさから今まで人前で話すことがなかったそうです。しかし、その体験を伝えることの重要性に気づき、今年から講演を始めたそうです。川崎さんは、小学校１年生のとき、家の玄関で被爆されたそうです。お父さん以外は家にいたため後遺症に悩まされながらも人生を全うしたそうです。ただ、お父さんだけは勤務していた小学校でなくなられたそうです。原爆が投下された後の逃げ惑う人々の凄惨な様子や被爆された後の家族一人一人の厳しい生活を聞いて、原爆の本当の恐ろしさを知ったように思いました。

二日目は、平和記念式典に参列しました。物々しい警備の中、海外の方や子供たちを含め、参列者の多さには驚かされました。参列者は多かったのですが、式は静まりかえった独特の雰囲気の中、厳粛に進められました。その場は、原爆や戦争で

なくなられた多くの方々の御霊を慰霊しようという思いが充満していたように感じました。平和への誓いでは、子供代表の二人が「広島の子供の私たちが勇気を出し、心と心をつなぐ架け橋を築きます」と力強く誓いました。戦後長い年月が経ちますが、この辛い体験を次の世代に引き継ぐことはとても大切だし、今、平和の中で生活している私たちの責任だということを改めて考えさせられました。

この日の夜は、灯籠流しを行いました。8 時半頃でしたが、多くの人たちが順番待ちをしていることに驚かされました。並んでいる人を見てみると、栃木県から来た中学生を含め、子供の姿も数多く確認できました。

今回の研修に参加した生徒たちは、この三日間で大切なことをたくさん学びました。この貴重な体験で学んだことを、それぞれの学校でしっかり伝えてくれることを期待しています。

最後になりますが、平和研修派遣事業に関わり、このような機会を与えてくださいました市当局の皆様、準備や送迎にご協力をいただきました保護者の皆様に心から感謝申し上げます。

派遣団員報告

原子爆弾の恐ろしさ

南河内中学校　二年　髙田　真羽

１９４５年8月6日午前8時１５分。

広島の町をまるっきり変えてしまった原子爆弾、それを投下したのは、B-29、エノラゲイという飛行機。原子爆弾は投下されて約４３秒後、地上６００メートルの高さで爆発し、大量の放射線を放ちました。表面温度は７２００℃爆心地周辺は３０００～４０００℃にもなり、毎秒２８０メートルの爆風が広島市民を襲いました。

１９４５年１２月までに全ての被害をふくめ死者は１４万人にもなってしまったそうです。

被爆を体験された川崎さんの講話の中で原子爆弾についての話がありました。広島に落とされた原子爆弾にはウランという原子が使われたそうです。しかし、爆弾にウランを６０kg搭載したのにもかかわらず爆発時にはたったの１kg以下のウランしか使われなかったというのです。僕はたった１kg以下のウランだけで城下町として栄えていた広島の町を、一瞬で焼け野原に変えてしまったことは、とても信じられませんでした。

平和記念資料館を見学しているうちに疑問に思ったことがありました。一つ目は、日本への原子爆弾投下の計画の名前が「マンハッタン計画」という事です。僕は「爆弾を投下する計画なのに、なぜアメリカ合衆国の地区名を付けたのだろう。」と不思議に思い、興味を持ちました。資料館内を周り調べてみると、当時軍の本部がニューヨーク・マンハッタンに置かれており、一般的に軍本部の工区名をつけるというやり方にならって「マンハッタン計画」としたためだということが分かりました。計画について疑問に思ったことは他にもありました。それは、日本が戦争に降参しなければ、広島、長崎以外のどこに原子爆弾を使用されていたであろうかということです。調べてみると、原爆を使用する計画の中に、京都、横浜、小倉が候補に挙がっていたそうです。これらの地が候補に挙がっていた理由は都市の規模や爆風で効果的に損害を与えられるためだからという事です。いずれの都市であっても、沢山の人々が被害にあわれるであろう事は容易に想像がつきました。これだけの被害をもたらす原子爆弾は、その時だけに留まらず年月を経てもなお、後障害という形で人々を苦しめています。一瞬にして全てを奪い、この世の終わりかと見まがうような真っ黒な空とキノコ雲を生み出す原子爆弾は絶対に使ってはいけないのです。こんな悲しい歴史はくり返してはいけないのです。僕は平和研修派遣団の一員として今回の研修で学んだこと、感じたことを身近な人から学校や地域の人まで広く沢山の方たちに伝えることを誓います。

この３日間で学び感じたものは、今後僕の人生の礎となる、とても貴重な体験でした。このような機会を与えてくださった下野市長に感謝すると共に、団員の

一員として忘れることのないよう今後も平和を唱えていきたいと思います。

絶対悪の根絶に向けて

南河内中学校　二年　山本　雅

今回の広島派遣学習では、三つのことを達成するために事前の準備を充分に行い、当日を迎えました。「核兵器の恐ろしさ・平和の尊さ・生命の尊厳」について、より理解を深め将来に生かし繋げるため、３日間広島県広島市で学びました。

２日目に平和記念公園で行われた平和記念式典では、私たちの予想を上回る国内外からの参列者の多さに、世界各国の平和への強い関心をまのあたりにしました。松井広島市長の「皆さん、７２年前の今日、絶対悪（原子爆弾）が放たれ…」から始まった平和宣言は、当時の悲惨な様子、放射線障害や健康不安などから、心身に深い傷を残し社会的な差別や偏見を生じさせ、生き延びた人々の人生をも大きくゆがめてしまったことをお話しされていました。

小学生男女二人による「平和への誓い」は、心に残る発表でした。誓いの中で、一人一人の命の重みを知ること、互いを認め合うことの大切さを話していました。それは、今後戦争のない平和な世界にしていくのだという決意を世界に発信する力強いメッセージでした。

原爆ドームは、当時の様子が再現されており生々しい原爆の脅威を目の当たりにしました。改めて戦争は起こしてはならないと感じました。

今では、当時の広島をイメージできないほどの復興が進み、被爆で亡くなった方々や家族の苦しみも薄れ悲惨な町並もきれいに整備され、住みよい場所へとなっていました。原爆投下時は、広島市全体が一瞬で焼け野原になり、もとの状態になるのはとても苦労したと思います。原爆に負けない強い気持ちがあったからこそ、今の広島市があると思いました。今年は、核兵器を法的に禁止する「核兵器禁止条約」が国連の条約交渉会議で採択されました。長年の被爆者や家族、関係者の方々の地道な努力によって世界が理解し、核兵器の無い世界へ一歩踏み出しました。

私は、戦争の被害を受けた広島を学び、自分の目的を達成することができました。広島派遣学習を通して心に誓ったことは、平和な世界にするために「戦争反対」の精神をもって訴え続けることです。また、自分ができる支援や、周りの人に呼びかけ、広く伝えていかなければならないという使命感を持つことができました。

非核平和都市に住む下野市民として、中学生である私ができる活動は、普段の学校生活から、正義が通り思いやりと感謝の気持ちをもった話し合いによる解決、悲しむ人のいない、笑顔の絶えない学校を目指すことです。戦争や原爆の記憶を風化させることがないよう微力ながら今回の経験をあらゆる機会で伝えていきたいです。

平和研修に行って気がついたこと

南河内第二中学校　二年　川田 悠月

私は、平成２９年度下野市・壬生町中学生平和研修派遣団の一員として、広島に行きました。今回参加しようと思った理由は、今、世界各国がミサイルを飛ばし自分たちも、いつ危険な目にあうか分からない世の中なので、被爆地である広島で核の恐ろしさや生命の尊さを学習しようと思ったからです。

実際に広島へ行き最初に向かった場所は、原爆ドームでした。近くで見た原爆ドームはなんとか原形はとどめているものの、今にも崩れてしまいそうで、ここで何があったのかということを考えることができました。その後、広島市青少年センターで被爆者の川崎宏明さんのお話を聞きました。

川崎さんは小学１年生、７歳の時に被爆したそうです。避難時は仕事でいなかった父を除いた家族６人で行動をしたそうです。途中で火傷やケガをした人とすれ違った時に振り返ると市内は大火災が起きていたそうです。

川崎さんのお話から、たった一発の原子爆弾がものすごい勢いで広島を熱線と爆風で包み込み無残な姿になってしまったということが分かりました。多くの人が苦しみながら亡くなってしまい、今も白血病やがんで苦しんでいる人がたくさんいます。戦争は終戦しても被爆者の方は今も大変な思いで闘っていることも知りました。

平和記念資料館では当時の被爆前後の写真や爆発した時の様子が表された再現映像などがありました。再現映像では平穏な日常が簡単に壊されていくところを見て、絶対に戦争は起こしてはならないものであると強く感じました。

また、平和記念式典では多くの人が参加をしていました。日本の方はもちろん外国の方も多くいらっしゃいました。８時１５分から亡くなられた方への黙とうがありました。１分間という、とても短い時間の黙とうでしたが、体感した時間はずっと終わらないような気がしました。７２年前にここでどれだけ悲惨なことが起こったのか、どれだけ戦争とは関係の無い人々が亡くなったのか、どれだけの方が被爆をした今も苦しんでいるのか、人間の命の重みを感じました。

式典の途中で行われた平和の誓いでは、子供代表の竹舛君と福永さんの誓いが心に残りました。それは「未来の人に戦争の体験は不要です。しかし戦争の事実を正しく学ぶことは必要です。」というものです。確かに戦争は、するべきでは無いと思いますが、学習を正しく学ばなければ戦争の恐ろしさを伝えることができません。とても重要なことだと、心に残りました。

川崎さんは講話をして下さった後、この話を人に話し継いでいってほしいとおっしゃっていました。自分の発信力はとても小さいかもしれませんが、戦争の恐ろしさや生命の尊さを後世に伝えていきたいです。

原爆の恐ろしさを知って

南河内第二中学校　二年　鹿倉　萌葉

私たち派遣団は、広島で被爆体験者講話や平和記念資料館、原爆ドームの見学、平和記念式典参列、灯篭流しなどの様々な貴重な体験をさせていただきました。

初めて訪れた広島の地は、見上げるほどの多くの高層ビルが立ち並び、路面電車が走り、たくさんの緑豊かな木々に囲まれた賑やかで美しい街並みです。

７２年前の８月６日８時１５分、たった一発の原子爆弾によって、一瞬で多くの罪のない人々を失い、焼け野原となった街だとは想像もできませんでした。

当時、小学１年生の時に被爆された川崎さんの講話では、地響きと同時に大きな爆音が鳴り、周りでは壊れた建物の下敷きになったまま焼け死んだ人、火傷やケガをした人の群れの光景が目に焼き付いているそうです。ご家族も被爆によってお亡くなりになり、川崎さんと妹さんは７０年以上過ぎた今でも障害に苦しんでいるそうです。

資料館では、熱線によるひどい火傷を負った人達やキノコ雲の写真、焼け焦げた服の遺品の展示物から衝撃を受け、そこにあったはずの命の尊さや重さを知りました。

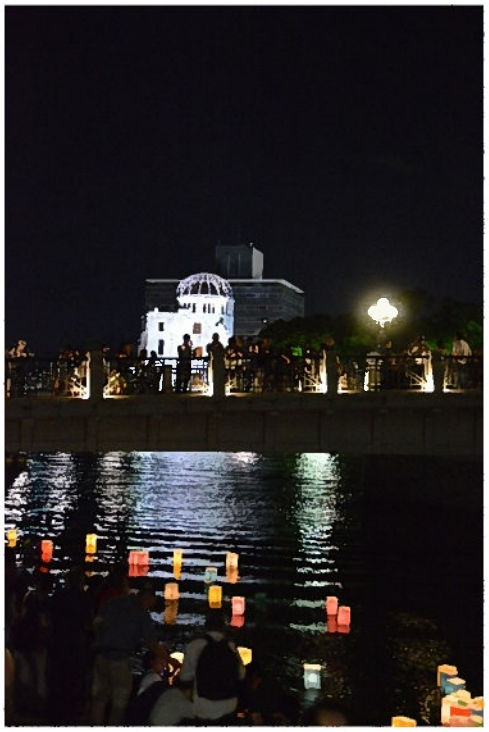
原爆ドームの前に立った時、私は、その光景が忘れられません。戦争を知らない私たちへ、原爆の恐ろしさや悲惨さを未来へ伝えてくれと訴えているように感じました。

平和記念式典で子ども代表の小学生が「平和への誓い」を力強く世界へ伝えていた事がとても私の心に響き、印象深く残りました。

８時１５分、一斉に黙とうをする中、鐘の音しか聞こえない１分間は、まるで時が止まり、亡くなった方が安らかにと思う祈りの時間でした。

人が作り出した原爆。人が落とした兵器。核兵器を無くす為には「戦争をしない事」が大切だと話していた川崎さんの思いを胸に刻み、戦争の悲劇が繰り返されない世の中が続くように。当たり前の日常が送れる事のありがたさや、今ある命がどんなに大切なのかを私なりに発信したいと思います。

最後に、今回このような機会を与えて下さった先生方、職員のみなさん、本当にありがとうございました。



72年前からの広島

石橋中学校　二年　浦木　航大

僕が今回、中学生平和研修派遣団として広島に赴き、平和記念式典への参列や、原爆により被爆者となってしまった川崎さんの講話会などを体験し分かったこと。それは、原爆が一度でも使用された場所は、その日から何十年間も人々が苦しむことになることと、その苦しみを繰り返さないよう、核の廃絶を願う人が日本を越え、世界中にたくさんいる、ということです。

１日目に行われた講話会で、川崎さんが次のようなことをおっしゃっていました。

「原爆は恐ろしいもの。何十年たっても突然健康被害が現れる。」

この話を聞いたとき、僕は改めて原爆の怖さを知りました。被害を受けてから数年間は症状が出なかったのに、突然白血病などに襲われてしまう、ということ。そのことを知り、原爆は、使われた人々に痛みや悲しみしか残さない、ということを自分の力で少しでも周りに広め、核の廃絶を願う人が増えるよう、行動を起こしたいです。

また、平和記念資料館の見学では、原爆の子の像のモデルになり、現在、記念公園内に千羽鶴を奉納するようになるきっかけとなった佐々木禎子さんについてや、原爆が落とされる前と後の広島の様子など、原爆について深く考えさせられる展示物が多く、勉強になりました。

記念公園内見学のときには、原爆ドームや平和の鐘、原爆の子の像など、テレビでしか見たことのないものを実際に見ることができ、貴重な体験となりました。

そして２日目、平和記念式典は、約５万人の参列者の中、原爆死没者名簿の奉納から始まりました。その中で行われた平和への誓いでは、代表の男女２名の小学生が堂々と平和への思いを発表しており、その中に、

「未来の人に、戦争の体験は不要です。しかし戦争の事実を正しく学ぶことは必要です。」

という言葉がありました。戦争の正しい事実を知り、戦争を知らない世代に繋げていく。そのことを小学生が話していたのがすごく衝撃的で心に残りました。

僕はこの研修で、７２年前からの広島について多くのことを学び、深く考えることができました。テレビやニュースなどでしか見たり聞いたりしたことのなかった光景を、自分の目で見て、肌で感じとることで、今まであまり実感の湧かなかった、原爆が落とされた広島のことを知ることができました。

この３日間で学ぶことのできた多くの事を、自分の家族、学校へと持ち帰り、普段の生活の中での会話や発表の場を通して、少しでも核廃絶への手助けになれるよう、努力していきたいと思います。

生命の尊さを知った３日間

石橋中学校　二年　倉井　遥

この３日間の平和研修派遣で私は、生命の尊さと平和の大切さを学ぶことができました。そして、「普通に学校に通えていること」「毎日、朝昼晩とご飯を食べていること」などそんな当たり前の日常がどんなに幸せなことなのかを知り、感じることができました。

広島に着いて最初に向かったのは、原爆ドームです。そこでは、写真では感じきれないほどの迫力に戦争の悲惨さや戦争の恐ろしさを感じました。また、その横を流れる元安川は、水を求めた多くの被爆者の方でいっぱいになっていたかと思うと衝撃と恐怖を覚え、言葉に表せないほどでした。

その後、私たちは当時７歳だった川崎さんから、被爆体験のお話を聞きました。原子爆弾が投下された瞬間のまぶしい光を、爆心地から１．３キロ離れた自宅で見た時のことや当時の様子、原子爆弾がもたらす後遺症の話など、貴重なお話をしてくださいました。川崎さんは、３つの思いを語ってくれました。「原爆など核兵器を無くすには戦争をしないこと」「戦争終結までの戦争続きの７０年余と、憲法により戦争放棄をうたった平和な７０年余、どちらが良いかということ」「今日の話が広がって、原爆・戦争の恐ろしさを知る人が広がること。それこそが、原爆や戦争が無くなる最善の方法であるということ」この３つが川崎さんの願いです。この願いは、私の心にとても響きました。被爆体験した方だからこそ話せるのだと思います。今後はこのお話を聞いた私たちも語り継いでいかなければならないと思いました。

広島平和記念資料館には、実際に被爆した方の写真、爆風を受けた服やビン、８時１５分で止まった時計などが展示されていました。中でも火傷を負った女性の写真は怖さを感じ、原子爆弾の恐ろしさがより強く伝わってきました。

２日目は、朝早く起きて平和記念式典に参列しました。会場は、多くの参列者であふれ、たくさんの人が広島に平和の願いを届けに来ているのだと思いました。今まで平和記念式典は、テレビでしか見たことがなかったので、厳粛な雰囲気を感じながら式典に臨むことができ、とても貴重な体験でした。

私は、この平和研修派遣団に参加して学んだ原爆の恐ろしさや被爆した人の苦しみ、生命の尊さ、平和の大切さを忘れずにたくさんの人に語り継いでいかなければならないと思いました。そして、この経験を生かし、少しでも平和な未来を築くために役に立ちたいと思います。

広島で学んだこと

国分寺中学校　二年　宮﨑　佑大

僕は、８月５日から７日の３日間、平和研修派遣団の一員として広島を訪れました。

初めて広島を目にした時、美しい街並に驚きました。そこからは、72 年前に原爆が落とされ多くの尊い命が一瞬にして奪われたという事実は、想像ができませんでした。

原爆ドームは、想像していたよりもボロボロで原子爆弾の破壊力、恐ろしさを肌で感じることができました。

被爆体験講話会では、爆心地からおよそ 1,300 メートル離れたところに住んでいた川崎宏明さんのお話を聞くことができました。当時は川崎さんのご家族全員が被爆され、特に父と弟は後ろから熱線を浴び背中と腕に大火傷を負ったそうです。避難時にけがや大火傷を負った人を目にしたときはとても恐ろしかったと言っています。市内は大火災が発生し、祖父は足の骨が見えるほどの大けがをしていたそうです。川崎さんは「原爆は戦争のために人間が作り、人間が落とした兵器。だから原爆など核兵器をなくすためには、戦争をしないことが大切。」と語ってくれました。

広島平和記念資料館では、高温の熱線により、ケロイドで苦しむ人の姿や、溶けてボロボロになった三輪車、衣類などがあり、被害を詳しく知ることができました。70 年以上たった今でも後遺症の白血病や心臓病に苦しみ戦っている人がいるということは、とても悲惨な事実です。改めて原爆は恐ろしいものだと感じ、二度と繰り返してはいけないものだと思いました。

平和記念式典では、広島市長さんを中心に多くの人が平和の大切さについて述べていました。「戦争の事実を正しく学ぶことは必要です。」という平和への誓いの言葉が印象に残っています。戦争を学ぶということは、平和を実現させるために必要不可欠です。僕が学んだ戦争の恐ろしさ、原爆の恐ろしさを学校や地域の人々に伝え、二度と同じことを繰り返さないための努力をしていきたいと思います。

この３日間を通して、僕は平和に対する願いが一層強くなりました。式典の鐘の音しか聞こえない１分間。僕は平和への願いをこめて黙とうしました。「今日のお話を家族などに話してください。それを聞いた人が次の人に伝えることで原爆、戦争の恐ろしさ知る人が広がる。これが戦争や原爆がなくなる最善の方法。」と述べていた川崎さんの思いを引き継ぎ、自分から積極的に戦争、原爆について伝えていきたいです。今も戦争をしている国がある中で、今、勉強ができ、幸せに暮らせていることに感謝してこれから生活していきたいです。

目と耳とこころで感じた広島

国分寺中学校　二年　仁藤　朱梨

私は、今回この派遣事業で初めて広島を訪れました。広島に到着し一番最初に感じた事は、なんて美しい街なんだろう…という事です。72 年前に原爆が落とされたとは、思えない美しい街でした。きれいに整備された道路、たくさんの自然に囲まれているこの街が、72 年前原爆が落とされ焼け野原になった街とは、とても想像できませんでした。

私達は、今回広島に行き被爆体験講話や平和記念資料館の見学、平和記念式典参列、灯ろう流しなどの貴重な体験をたくさんさせていただきました。その中でも私が特に印象に残ったのは、被爆体験講話と平和記念資料館の見学です。被爆体験講話では、当時小学校１年生だった川崎宏明さんの話を聞きました。

川崎さんは７人家族で３人兄弟の長男、爆心地からおよそ１．３㎞はなれた所に住んでいたそうです。家族と一緒に避難している時、あちらこちらで亡くなっている人々、けがや火傷した人々とすれ違った恐ろしさは今でも忘れられないそうです。「広島市内は大火災が発生して火の海となり、祖父は足の骨が見えるくらいの大けが、母や弟はたくさんのガラスのかけらが突き刺さる大けがをした。」と語ってくれました。一命をとりとめた母は心臓病で、弟は癌で亡くなったことも、お話してくれました。妹と川崎さん自身も、今なお心臓病で苦しんでいるそうです。周囲の人たちも終戦後、白血病や癌にかかる人が多数いて、次々と亡くなっていったとのことです。本当に聞いていてつらいお話でした。

また、平和記念資料館の見学では目を覆いたくなるような、息のつまる酷い写真や展示物ばかりでした。痛々しい姿の女性や、原爆が落とされた８時１５分を指したまま止まった腕時計、その日３才の男の子が乗っていた丸こげになった３輪車。その男の子はその夜に亡くなったと書いてありました。平和記念資料館では、戦争の惨状がありありと伝わってきて戦争を知らない私達に戦争、核兵器の恐ろしさや平和のありがたさを訴えかけているように感じました。

私は今回の平和研修派遣事業を通し、平和の大切さ、核兵器の恐ろしさなどを改めて知ることができました。栃木県と広島県は遠く離れています。７２年も前に遠い場所でおきた事と思ってしまう人が多く、広島のこの悲惨な真実を身近に感じる事は難しいと思います。でも、この派遣事業に参加した私は自分の使命として周囲の人に伝えていきたいです。撮影してきた写真を見てもらうこと、自分の目と耳と心で学んできたことを伝えることから始めようと思います。

「未来の人に戦争の体験は不要です。しかし、戦争の事実を正しく学ぶことは必要です。」式典での平和への誓いの言葉が深く胸に響きました。世界へ平和の願いが届くよう私も伝えていきます。

頭髪は焼けちぢれ、
顔、腕、背、足の
いたるところの火ぶくれが破れ、
火傷の皮膚が
ボロぎれのように垂れ下がる。

頬に涙が伝い、
ファインダーを通す
惰景がうるんだ。

まさに地獄だ。